

# 紀 要

第 19 号

2006. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

## 米原市村居田古墳の再検討

辻川 哲朗

はじめに (図1)

村居田古墳は滋賀県米原市村居田に所在する。長浜平野の東側に南北に長く連なる横山丘陵の北端部付近にあたる。その周辺一とくに横山丘陵上と丘陵をはさんだ西側(琵琶湖側)一の平野部には多数の古墳が分布しており、長浜古墳群(横山北部古墳群)として捉えられている。村居田古墳もこの長浜古墳群を構成する古墳の一つとして考えることができる。近年の長浜市教育委員会による詳細分布調査や、周辺で実施された、ほ場整備に伴う発掘調査によって、古墳群の実態が次第に明らかになりつつあるものの、いまだ不明な部分も多い。

村居田古墳は後述するように近世に発掘され、その後、明治期に「息長廣姫陵」として陵墓治定された。陵墓に指定されていることもあって正式な調査は全くなされておらず、その実態は明らかとはいえない。しかし、後述するように発見時の記録からは家形石棺と思われる石棺蓋の出土が知られ、長浜古墳群の中でも非常に重要な古墳となる可能性を示唆している。

そこで本稿は村居田古墳に関する数少ない情報の一つである採集埴輪について紹介することを目的の一つとし、加えて現状で入手しうる情報からではあるが、本古墳について若干の検討と問題の提起を行いたい。

村居田古墳については、少ないながらもいくつかの論説が提示されている。戦前の郡志類については次章において触れることにし、ここでは戦後期を対象を限定して、その内容をみることにしたい。

丸山竜平氏(丸山1971)は近江地域の石棺について先駆的な研究を行った。そのなかで村居田古墳については、概略図が提示されているのみで詳細を知りえないとするものの、一覧表には墳形が「前方後円墳?」で、内部主体が「横穴式石室」であり、「家形石棺蓋」が出土していること、年代が「6世紀前葉」頃と記述した。

村居田古墳の墳形については、戦前には現在の陵墓として治定された円丘から円墳とされていた<sup>(1)</sup>が、それに対して前方後円墳説を示したのは、この丸山氏の論説が(管見では)最初であると考えられる。ただ、その根拠は示されておらず、詳細を知りえない。

田中勝弘氏(田中1986)は光運寺本堂裏の基壇石垣改修のさいに採集された埴輪片を提示した。その埴輪の特徴から「5世紀末頃のもの」として、家形石棺の型式から考えられる年代とほぼ一致すると考え、光運寺本堂付近にかつて古墳が存在したことは確実であり、それは5世紀末頃のものとの結論付けた。

用田政晴氏(用田・細川1992)は、疑問符つきながらも前方後円墳の可能性を指摘し、「かつて、石室(?)と石棺が発見された光運寺本堂南に13×5mの楕円形の高まり(3m)が残るのみで、前方部端の名残か。前方後円墳とすれば、本堂付近が後円部に相当し、墳長は30m程度、主軸は南北方向となる」とした。時期については、埴輪から前方後円墳研究会編年(広瀬1992)7期(中期後葉)に位置づけた。

宮成良佐・森口訓男氏(宮成・森口1996)は、『長浜市史』において、昭和4年に実測作成された「皇后廣姫息長御陵之図」(以下、「陵墓図」とする)に基づき、墳長100m以上、後円部径55m以上、前方部長53m以上の前方後円墳であったとする。時期については家形石棺等から5世紀代のものとしている。

先の田中氏の位置づけを受け、和田晴吾氏(和田1998)や高木恭二氏(高木1998)は、村居田古墳の石棺が阿蘇溶結石凝灰岩製の家形石棺である可能性を指摘している。

### 1. 発見の経緯と経過

論を進めるにあたり、村居田古墳の発見の経緯と

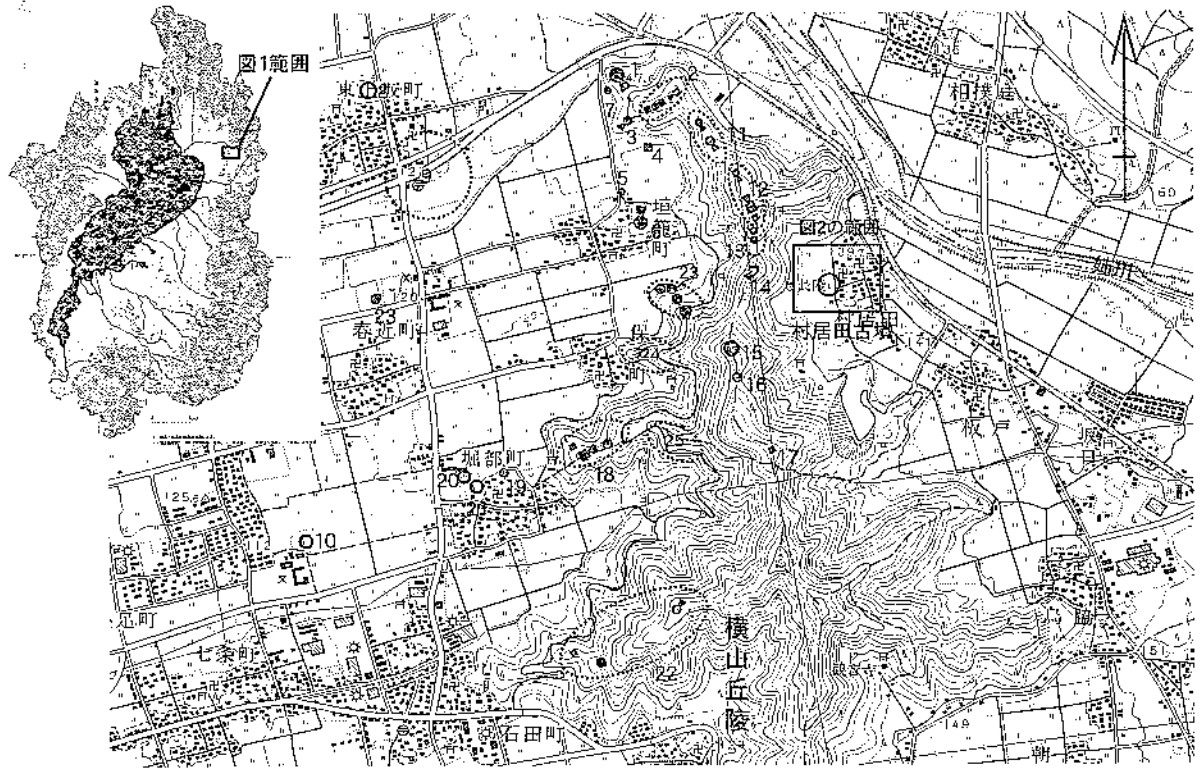


図1 長浜古墳群の主要古墳(S=1/25,000)

- 1:長浜茶臼山古墳, 2:龍ヶ鼻古墳群, 3:山の鼻古墳, 4:神塚古墳, 5:上寺地古墳, 6:垣籠古墳, 7:西山古墳, 8:上葛塚古墳, 9:柿田古墳群,  
 10:丸岡塚古墳, 11:小倉古墳群, 12:堂の前古墳群, 13:犬飼古墳群, 14:坂南古墳, 15:北平古墳, 16:犬飼古墳, 17:梶原古墳,  
 18:岩田山古墳群, 19:北山塚古墳, 20:御奥塚古墳, 21:西塚古墳, 22:大門古墳群, 23:丸子山古墳群, 24:日向山古墳群, 25:円明寺古墳群

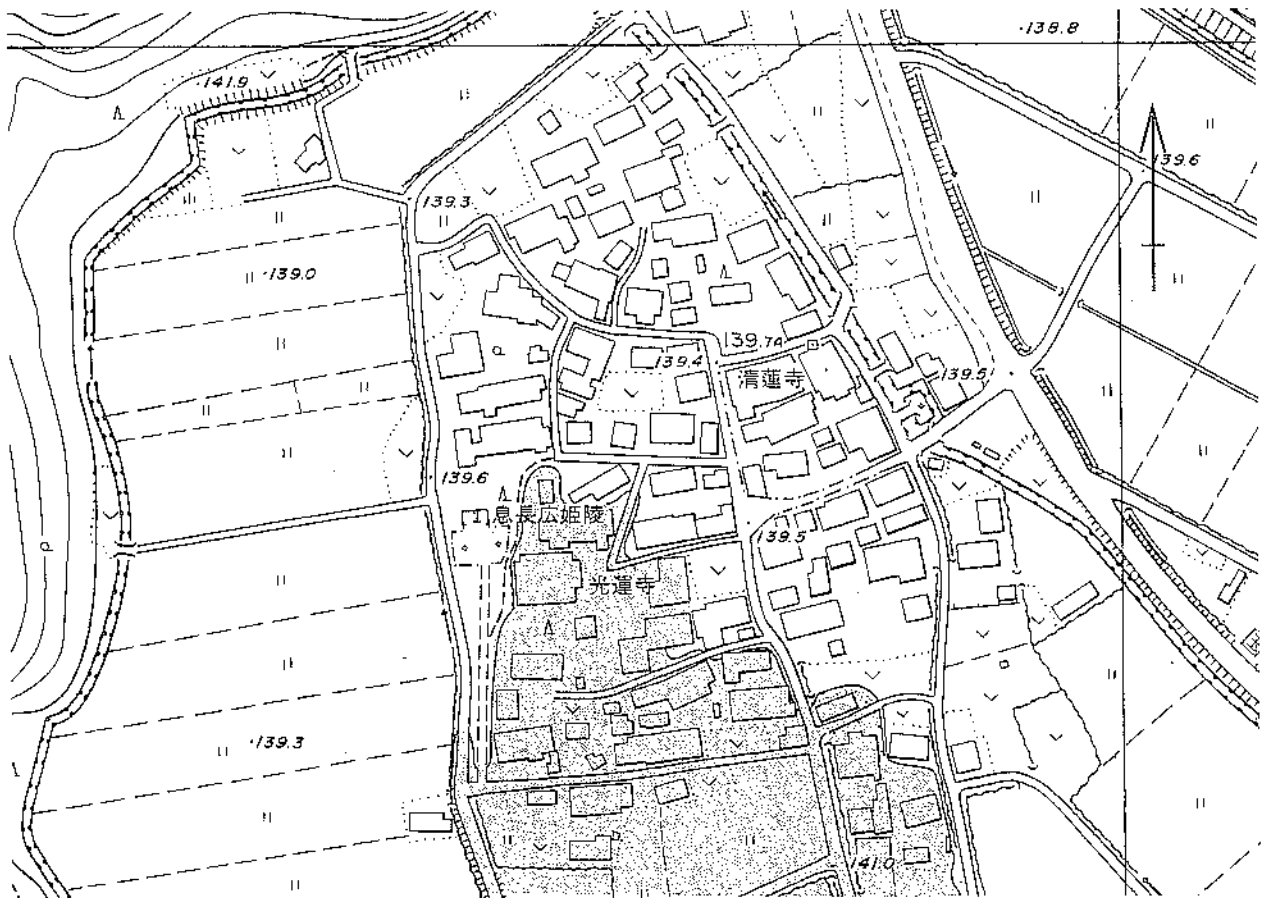


図2 村居田古墳周辺の地形 (S=1/2,500)  
 網掛:標高140m以上

経過を整理しておきたい。発見の経緯と経過については、先述したように発見が江戸時代に遡るとともに、正式な発掘調査を経ていないことから、限られた記録類から推測するしかない。残された記録類は『坂田郡志』（以下、『郡志』とする）がほとんど唯一といってよい。

この『郡志』所収の記載は、中川泉三（1869～1939）によって記述されたものである。長文であるが、以下の検討に不可欠と判断するので、該当部分を引用する。

「元禄九年、同村光運寺の本堂改築の為、其の地を開墾せしに、圖らずも石槨顯われ、其の中に大石棺の埋藏さるゝを發見し、里人大に驚き、工事を中止し、領主の指揮を請ひたり。領主之を檢し、其の村人、堀居左近に累世守護の由緒あるを以て、發掘品を其の邸内の一隅に遷し、僅の兆域に埋藏し竹柵を繞らさしめたりしが、明治五年十月、教務省より山内大録、猿渡中録出張して、實地を檢察せしが、明治八年に至り、陵掌・陵丁を置かれ、十年十月、兆域確定されんとするに際し、當地の左近は其の邸地を割きて之を獻納せり。同年十一月、御陵を造営せられ、其の兆域百七十五坪とす。別に舊御陵地の兆域三十八坪ありしが、明治十六年十月宮内省の所轄に屬したり。同十七年十二月陵掌・陵丁を廢し、守部一名を置かる。同二十八年九月石柵を設けられ、數百年間荒涼たりし陵墓も、其の規模漸く整頓するに至れり。明治五年十月、檢察當時の古圖により、石棺の蓋石と石槨の巨石とを模寫して挿入す」（滋賀縣坂田郡教育會編1941）。

この記録はおおむね時系列にそって記述されており、以下の10項目にまとめることができよう。

- ①元禄9（1696）年、光運寺本堂の改築工事中に「石槨」が現れ、その中に埋藏された「大石棺」を發見した。
- ②そのため工事を中止し、領主が検分した。
- ③村人は、堀居左近が累世守護の由緒があるので、發掘品を堀居邸内に埋藏し、竹柵を廻らした。

以上の②・③はその年代が分からないが、文脈からみると発見後間もないことと判断される。

- ④明治5（1872）年10月、「教務省」から山内大録・猿渡小録が出張し、現地を檢察した。

- ⑤明治8（1875）年、陵掌・陵丁が置かれた。

- ⑥明治10（1877）年10月、兆域を確定しようとしたさいに、堀居左近が屋敷地の一部を獻納した。

- ⑦同年11月、御陵が造営された（兆域175坪）。

- ⑧明治16（1883年）10月、御陵の兆域とは別にあった旧御陵地（兆域38坪）が宮内庁所轄となる。

- ⑨明治17（1884）年12月、陵掌・陵丁を廢止して、守部1名が置かれた。

- ⑩明治28（1895）年9月、石垣が設置された。

引用文末で記された「檢察當時の古圖」（以下「古圖」とする）は図4に示した。この「古圖」は「息長陵發掘物 大原村大字村居田」と題されるもので、「石槨の巨石」と「石棺の蓋」が描かれている。「明治五年十月検査の時寫生せし原圖により縮寫す」と記されていることから、明治5年10月に「教務省」官吏が檢察したさいに写生した「原圖」を『郡志』編纂時に縮寫したものであることが分かる。

ここで問題となるのが明治5年の檢察時に写生した対象が何であったのか、という点である。一つの可能性としては、明治5年以前の段階—おそらくは発見時に描かれた「第一原圖」があって、それを写生したことが考えられる。別の可能性とは、明治5年の検査時には「石槨の巨石」と「石棺の蓋」が現地にあり、それを写生したとみる考えである。いずれかを決めることは困難であるが、発見時の記録であればその他の「發掘品」についても記録されたと思われるにもかかわらず、そうでなかったという点からすると後者の可能性も否定できないと考える。

## 2. 墳丘の検討

### 2.1 現況の観察（図2・3）

村居田古墳の現況は、昭和4年に作成された「陵墓図」の状況から、さほど変化はないと考えられる。ただし、当然ながら「陵墓図」は陵墓を中心とする限られた範囲の表示にとどまる。そこで周辺部を含めて検討する必要から、ここでは「陵墓図」と旧山東町が作成した「山東町全体図No.1」とを合成した図面（図3）を作成した。以下、それに基づいて検討を進める。

村居田古墳は村居田集落の東端部にある光運寺



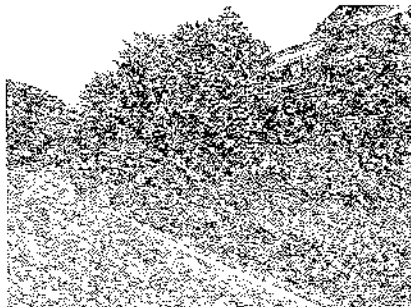
A:光蓮寺本堂, B:旧御殿地, C:現陵墓(拝所・墳丘)      ▲:撮影位置      S=1/1250



1.現陵墓(拝所・墳丘) - C地点



2.旧御殿地 - B地点



3.ア-オのライン

図3 村居田古墳現況図・写真

付近に想定される。光運寺現本堂の北西側には、現在「息長陵」に治定されている陵墓地（図3のC地点、以下、「現陵墓地」とする）がある。村居田古墳周辺の地形については、図2に標高140m以上の範囲を網掛により示したが、光運寺付近から南側が高く、東西北側が低いことが分かる。横山丘陵から派生する支尾根を利用してその頂部付近に古墳が造営されたと考えられることができる。

現陵墓地は南側にある拜所と、その北にある直径10m程度の円形マウンドからなる。また、光運寺の本堂の南側には長径10m程度、短径7m程度のマウンドがあり、木柵によって囲まれている（図3のB地点）。

「陵墓図」では参道とともにこの二地点が陵墓として扱われている。前章において整理した発見後の経過からみて、C地点が明治10年に造営された「御陵」であり、B地点が発見後に堀居左近邸の一部を割いて発見品を埋蔵した箇所にあたる可能性が高い。明治16年に宮内庁の所属となった旧御陵地というのもこのB地点を指すものとする。

## 2.2 墳丘の検討

先述したように、村居田古墳の墳丘については複数の復元案が提示されている。次に、これらの復元案について検討してみたい。

最初に用田氏の復元案であるが、氏は現本堂南の「13×5mの楕円形の高まり（3m）」があり、それが「前方部端の名残」として、「前方後円墳とすれば、本堂付近が後円部に相当し、墳長は30m程度、主軸は南北方向となる」とした（用田・細川1992）。現本堂南の「楕円形の高まり」とは図3のB地点に相当すると考えられる。このB地点は、先に触れたように『郡志』の記述によると、発見後に堀居左近邸の一部を割いて発見品を埋蔵した箇所であり、明治16年に宮内庁の所属となった「旧御陵地」にあたると思われる。そうすると後世の手が加わっている可能性は否定できず、復元の根拠とするには不安が残る。

一方、宮成・森口氏は全長100m以上の前方後円墳に復元されている。その根拠は光運寺周辺の地割りであると推定する。図3に基づくと旧参道とその

東側の宅地部分の境界ライン（図3・アーイーウーオ、同写真3）が緩やかにカーブを描き、南面する前方後円墳の前方部西側と見ることができる。さらに光運寺本堂を挟んで東側では、クーケーコの諸点を結ぶラインが西側のアーイーを結ぶラインと対応してくびれ部状を呈している。以上から、光運寺本堂付近がくびれ部にあたり、その南側に前方部が、その北側に後円部が続くと想定することになる。前方部の前端については、段差が認められるウーエ付近の東西ライン、もしくは東西に走る里道からオーカを結ぶラインが想定できるが、段差の明確さから判断すると、前者をとるべきであろう。その一方で後円部については、それを示す地割が明確でないが、クーケー付近の円弧を利用すると径50m程度に復元できる。以上から、復元される墳長は100～120m程度となる。ただ、この復元案にも問題が残る。

問題は想定される埋葬施設との位置関係である。『郡志』では、元禄9年の本堂改築工事中に石棺・「石槨」が発見され、村人は堀居左近の邸内の一隅に発掘品を遷して埋蔵したとする。この記述からすると、石棺・「石槨」が見つかった地点と、発掘品を遷し埋蔵した堀居左近邸内の地点とは異なることが分かる。先述したとおり、堀居左近邸の埋蔵箇所が図3のB地点（旧御陵地）に相当するとすれば、すくなくともB地点は埋葬施設の所在地ではない。それでは、現本堂付近が石棺・「石槨」の所在地と考えて見ると、現本堂の位置は先に想定した前方後円墳のくびれ部付近に相当することになる。このように、くびれ部付近に埋葬施設を配する例は、全くありえないとまではいえないものの異例な感を否めず、その復元案には疑問が残されるのである。

ただし、この疑問は「元禄9年に改築された本堂の位置＝現本堂の位置」という前提に基づいている。しかし、この前提が本当に成立するのかどうか確認できていないのである<sup>12)</sup>。そのため「現本堂の場所＝元禄9年に改築された本堂の位置＝埋葬施設の所在地」とする前提から離れると、想定される後円部付近（図3の現本堂北側付近）に埋葬施設があったとする考えが成立する余地はまだ残されている。

息長陵發掘物  
大原村大字村居田

明治五年十月検査の時  
寫せし原圖にも補寫す

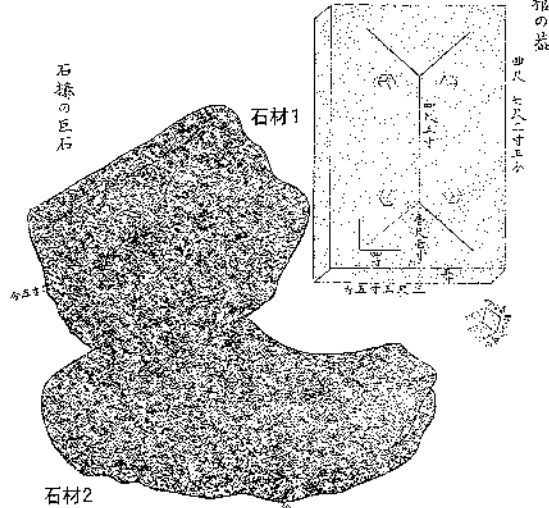


図4 明治五年に模写された「古図」  
(『郡志』所収、一部加筆)

### 2.3 小結

いずれにしても、現段階において知りうる情報からは、村居田古墳の墳丘を具体的に復元することは困難であるといわざるを得ない。

## 3. 埋葬施設と石棺の検討

### 3.1 埋葬施設の検討 (図4)

埋葬施設について『郡志』では、内部に石棺を納めた「大石槨」と記述しており、少なくとも何らかの石積みによる施設が石棺の外側に存在したことが分かる。

また、「古図」には「石槨の巨石」とされる板状石材二石が示され、それぞれに法量が記載されている。仮に図4の右を石材1、左を石材2とすると、石材1は長軸1丈6尺2分(約4.86m)・短軸5尺2寸5分(約1.57m)・厚さ7寸2分(約0.21m)、石材2は長軸5尺3寸8分(約1.61m)・短軸3尺2寸(約0.96m)・厚さ1尺2寸5分(約0.37m)となる。石材1の長軸が5m近くあり、かなり大きいことが分かる。また、1・2ともに厚さが0.2~0.4m程度であり、板状という表現が適当な形態である。

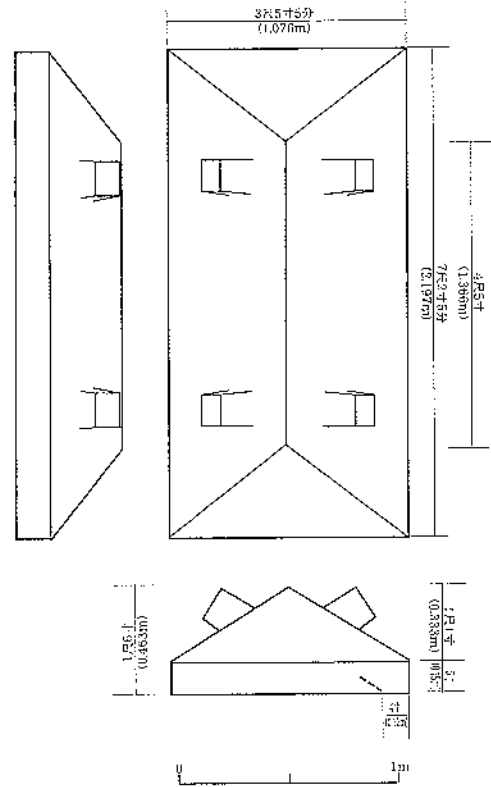


図5 「古図」から復元した石棺蓋

『郡志』にいう「大石槨」の構造がいかなるものであったのか、この二石の石材から推測するのは困難である。ただし、少なくとも石材1のような長さの板状石材が石室壁面に用いられることは想定しがたい。また、竪穴系の石室(石槨)とすると、石棺から想定される幅は約1m強であり、石材1のような大きさの石材を天井石として用いることもやや考えにくい。そうなると横穴式石室の天井石材として考えることになる。しかし、以下に述べるように石棺等から推定される造営時期を考慮する限り、積極的に横穴式石室を想定することも難しく、「大石槨」の具体相については現時点では結論づけがたい。

### 3.2 石棺の検討 (図4・5)

次に「古図」に描かれた「石棺の蓋」について見てみたい。この石棺蓋にも各部の法量が記載されている。それらを参考にして形態を復元したものが図5である<sup>15)</sup>。この石棺蓋において特徴となる点は縄掛突起の形状と法量である。縄掛突起は長辺側に各辺二箇所ずつ、突起の各辺が約15cm前後の小振りな角柱状突起として表現されている。石棺蓋頂部に

は長軸方向の線が引かれており、平坦面は表現されない。石棺蓋の法量は長辺が曲尺7尺2寸5分(約2.2m)・短辺が3尺5寸5分(約1.08m)を測り、高さは推測ながら約0.46mを測るもので、比較的長細い平面形態をとる。

このような特徴から見ると、和田晴吾氏(和田1998)や高木恭二氏(高木1998)の指摘するように、本例は古式の家形石棺の蓋と見るのが最も妥当であると考えられる。類例として大阪府長持山古墳2号棺や奈良県野神古墳等をあげることができる(間壁ほか1976・和田1976)。これらの古式家形石棺はいずれも阿蘇溶結凝灰岩製であることが知られており、本例もまたその可能性が高いものであろう。これらの家形石棺をもつ古墳は古墳時代中期末葉から後期初め頃にその造営時期を求められることから、村居田古墳の所属時期を想定する手がかりとなる。前方後円墳集成編年7~8期頃を想定することができよう。

### 3.3 小結

以上の埋葬施設と石棺の検討からは、本例が具体的様相は確定できないものの、何らかの石室系施設

内に古式の家形石棺をおさめていた可能性があることを確認することができた。さらに、古式の家形石棺から造営時期を想定した。

## 4. 採集埴輪の検討

### 4.1 概要(図6)

採集された埴輪の大半は田中氏により報告がなされている。辻川も何度か現地を訪れ、若干ながら埴輪片を採集している。今回、田中氏報告分を再実測し、辻川採集分と合わせて提示することにした。

これらの採集地点については、田中氏報告分が本堂西側の基壇石垣の改修に伴って採集されたものとされる。辻川採集分は図3のアーイ付近の参道とケ付近の敷地内である。いずれも現本堂付近の高まりとその周辺からの出土であり、現本堂が位置する高まりが墳丘である可能性を示している。

採集埴輪はすべて円筒埴輪片である。確実な形象埴輪の存在は確認できていない。採集埴輪のうちで図示しえたのは13点である。胴部の破片が中心で、全形をうかがえるものはなく、確実に朝顔形埴輪と判明できるものも認められなかった。現状で黒斑

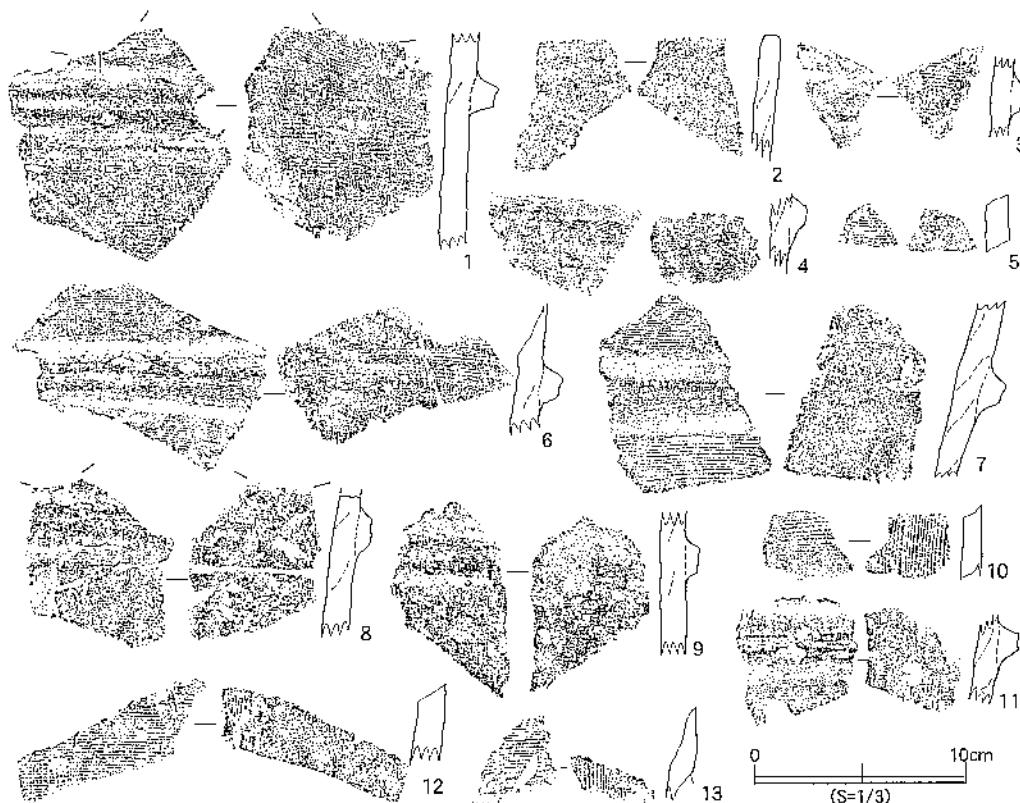


図6 村居田古墳採集埴輪



は確認できず、すべて窆窯焼成品と見ることができ  
る。色調は橙（褐）色系を基調とする。外面調整は  
一次タテハケ調整後に二次調整としてヨコハケを  
施している。ヨコハケはハケ原体の停止痕が認めら  
れない例が大半であるが、8・13には不明瞭ながら  
も停止痕が認められたことから、B種ヨコハケ調整  
が採用されていたと考えられる。内面はハケ調整・  
ナデ調整を併用する。突帯は断面台形で、突出度合  
も比較的顕著である。突帯間隔の判明するものはな  
い。1・8には円形スカシの一部が確認できる。復  
元しえた胴部径は29~33cm程度である。2は普通  
円筒埴輪の口縁部片と思われる破片である。直立気  
味の口縁で、端面をヨコナデによって調整する。

村居田古墳例のように窆窯焼成品で、外面調整が  
ヨコハケ（B種ヨコハケを含む）主体となるのは、  
川西編年Ⅳ期（中期後半）に位置づけることができ  
る（川西1978）。

#### まとめ

以上、検討を進めてきたが、まとめにあたって検  
討の内容を要約し、若干の問題を提起しておきたい。

**墳丘について** 現状で得られるデータからは、埋  
葬施設の位置関係を確定し得ない以上、前方後円墳  
説を想定する余地があるものの、その復元は可能性  
の域にとどまらざるをえないと考えた。

**埋葬施設について** 検討からは、本例が具体的様  
相は確定できないものの何らかの石室系施設内に  
古式の家形石棺をおさめていた可能性があることを  
確認することができた。家形石棺は形態的特徴か  
ら見て、阿蘇溶結凝灰岩製石棺と考えられ、その搬  
入例としてはおそらく東限となるものである。

**所属時期について** 石棺からは中期末葉頃を中  
心とする時期を、埴輪からは窆窯焼成導入以降の中  
期後半をそれぞれ想定でき、従来の位置づけを追認  
することとなった。

**長浜古墳群での位置づけ** 横山丘陵とその周辺  
には前期以降、多数の古墳が築造されており、その  
中には首長墓と考えるべきものが複数認められる  
ことから、首長墓系列の存在が想定される。

ただし、首長墓系列の実態について確定されてい  
るとはいいがたい。とりわけ、前期から中期前半頃

にかけての首長墓については、近年の分布調査によ  
り資料的な蓄積が進みつつあるものの、いまだ不明  
な部分を多く残している。

また、中期後半以降の首長墓の動向についても  
諸説が提示されている。湖北地域最大の規模を誇る  
長浜茶臼山古墳（前方後円墳、全長92m）の位  
置づけについては、中期と見る論者が多い一方で、  
前期と考える説（宮成・森口1996）もある。また、  
長浜茶臼山古墳の近辺にある垣籠古墳（前方後円  
墳、全長約60m）についても、中期古墳とみなし  
て長浜茶臼山古墳に先行させる考え（田中1990）  
や、長浜茶臼山古墳に後出するものの中期古墳の範  
疇で理解する考え（用田・細川1992、丸山1995、  
宮成・森口1996）がある。

この問題について、出土埴輪の検討から中期中  
頃に長浜茶臼山古墳が、後期前葉頃に垣籠古墳が  
それぞれ造営されると想定したことがある（辻川  
2003a・b・c）。そのさいには長浜茶臼山古墳と垣  
籠古墳との間を埋める首長墓の実態を明らかにし  
えなかったが、今回の検討により、この間の首長墓  
として、中期末頃に位置づけられ、九州地域から搬  
入された家形石棺を有する村居田古墳が有力候補  
として考えることができるようになった。

**村居田古墳の意味** そう考えた場合、村居田古  
墳がいかなる墳形・規模であったのかという点が  
問題となってこよう。宮成・森口氏の想定するよう  
に100m級の前方後円墳に復元するならば、長浜茶  
臼山古墳→村居田古墳→垣籠古墳の順で、中期後  
半から後期初め頃にかけて、大型・中型の前方後円  
墳が三代にわたって築造されたことになる。そう  
なると、当該期の長浜古墳群が、湖北地域はもちろ  
ん、近江地域全体においても突出した首長墓系列で  
あったと見なければならなくなる。以上から、村居  
田古墳の墳形・規模がいかなるものであったのかと  
いう点が古墳時代中期の近江地域を考えるうえで、  
重要な課題となってくる。まさにこの点によって、  
村居田古墳の墳丘の実態究明が強く望まれるので  
ある。

以上、先学による検討結果を追認するとどまる  
部分が大半を占める結果となってしまったが、本稿  
が長浜古墳群の中における村居田古墳の重要性を

認識していただく一助となれば幸いです。

### (謝辞)

本稿は、平成17年8月12日に開催された米原市歴史講座において「埴輪とまつり」と題して口頭発表した内容の一部を基にして、それを大幅に書き改めたものである。歴史講座での発表の機会をいただいた米原市教育委員会の高橋順之・高畑光昭両氏に厚くお礼申し上げたい。

本稿を作成するにあたっては、用田政晴氏（琵琶湖博物館）から資料の実見に御配慮いただいたうえ、資料の公開を快諾いただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げる。また、田中勝弘氏からはご指導・ご教示を得た。お礼申し上げる次第である。重岡卓氏には「古図」解説にあたって有益なご教示を得た。記してお礼申し上げたい。

(つじかわ てつろう：調査普及課 主任技師)

### 挿図典拠

- 図1 国土地理院1/25,000「長浜」をベースマップとし、長浜市教育委員会による分布調査結果（森口・太田2005）に基づいて辻川作成。
- 図2 「山東町全体図No.1」をベースマップとして、辻川作成。
- 図3 「皇后廣姫息長御陵之図」（宮内庁書陵部陵墓課編1999）と「山東町都市計画図」をベースマップとして、辻川作成。写真は辻川撮影。
- 図4 『坂田郡志』（滋賀縣坂田郡教育會編1941）による。一部加筆。
- 図5 辻川作成。
- 図6 1～4・6・8～13は田中氏報告分であり辻川が再実測した。5・7は辻川採集分であり、辻川が実測した。

### 註

- (1) 目に付いた資料として以下の事例を挙げておきたい。  
「息長陵 東海道線近江長岡驛より5軒同驛及び長濱驛よりバスの便あり 坂田郡大原村大字村居田に在る。第三十代敏達天皇皇后の御陵。皇后は御諱を廣姫と申し、息長眞手王の女であらせられた。御陵は圓墳で周圍にカナメ生垣をめぐらす。」（滋賀縣史蹟名勝天然紀念物調査會編1936）
- (2) この点については、今後近世・近代資料を検索し、検討を続けたい。
- (3) 図5の作成にあたって以下の点を考慮した。石棺蓋短辺の傾斜面に記入された数値（1尺1寸）が、傾斜面の斜距離を示すのか、垂直高さを示すのか判断に迷ったが、前者では蓋頂部長（4尺5寸）が確保できないことから、後者として復元するのが妥当であると考えた。また、石

棺蓋の図の左隅付近にはL字形の線が描かれるとともに、短辺側端部との間に「四寸」の標記があるが、これは内面の端部の厚さと形状を透視的に示したものと解釈した。

### 引用・参考文献（50音順）

- 川西宏幸（1978）「円筒埴輪総論」『考古學雑誌』64-2、日本考古学会
- 宮内庁書陵部陵墓課編（1999）『陵墓地形図集成』學生社
- 滋賀縣坂田郡教育會編（1941）『改訂近江國坂田郡志 第一卷』（1971年発行の名著出版復刊本による）
- 滋賀縣史蹟名勝天然紀念物調査會編（1936）『滋賀縣史蹟名勝天然紀念物概要』
- 高木恭二（1998）「阿蘇石製石棺の分布とその意義」『継体大王と越の国』福井新聞社
- 田中勝弘（1992）「東部（滋賀・三重）」石野博信他編『古墳時代の研究』10、雄山閣
- 田中勝弘・奈良俊哉（1986）『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』山東町教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 辻川哲朗（2003a）「長浜市埴籠古墳の再検討」、松藤和人編『考古学に学ぶ』（同志社大学考古学シリーズD）同志社大学考古学研究室
- 辻川哲朗（2003b）「近江地域の円筒埴輪編年」『埴輪論叢』4、埴輪検討会
- 辻川哲朗（2003c）「長浜古墳群の埴輪」『北近江』1、北近江古代史研究会
- 西川太次郎・横田立次郎・中川泉三編（1935）『長濱案内』（第三版）財団法人下郷共済会
- 広瀬和雄（1992）「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 近畿編』山川出版
- 宮成良佐・森口訓男（1996）「衰族と古墳」長浜市史編さん委員会編『長浜市史1 湖北の古代』
- 森口訓男・太田浩司（2005）『詳細分布調査報告書 横山古墳群 横山城跡及び関連紫』（長浜市埋蔵文化財調査資料第52集）長浜市教育委員会
- 間壁忠男・間壁葎子・山本雅靖（1976）「石棺研究ノート（四） 石材からみた畿内と近江の家形石棺」『倉敷考古館研究集報』12、倉敷考古館
- 用田政晴・細川修平（1992）「近江」『前方後円墳集成 近畿編』、山川出版社
- 丸山竜平（1971）「近江石部の基礎的研究—近江・大和の石棺とその石工集団—」『立命館文学』312、立命館大学文学部
- 丸山竜平（1995）「近江」石野博信編『全国古墳編年集成』雄山閣
- 和田晴吾（1976）「畿内の家形石棺」『史林』59-3、史学研究会
- 和田晴吾（1998）「畿内の石棺—長持形石棺と家形石棺」『継体大王と越の国』福井新聞社

#### 編集後記

序文にありますように、本協会は35周年を迎えました。これまでに蓄積された文化財に関する情報は膨大なものであります。その情報にふたたび埋もれることのないよう心がけたいものです。さて、今回の紀要には8本の力作の論考が寄せられました。さらに、35周年を記念して紀要の総目次も巻末に掲載いたしました。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを願っております。

(M.N.)

平成18年(2006年)3月

#### 紀 要 第19号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL (077)548-9780

FAX (077)543-1525

URL: <http://www.shiga-bunkazai.jp>

E-mail: [mail@shiga-bunkazai.jp](mailto:mail@shiga-bunkazai.jp)

印刷・製本 富士出版印刷株式会社